

戦争の時代に女性の権利を考える

清水奈名子（宇都宮大学国際学部教授）

2025 年は日本社会にとって、「戦後 80 年」の節目の年です。その一方で、世界各地で戦争が続いています。子どもを含む一般市民が連日のように犠牲となっている今の世界が「平和である」とはとても言えない、と感じておられる方も多いのではないのでしょうか。

さらに米国をはじめとして、日本国内でも、一部の政治指導者たちが「敵」だと見なした人々を攻撃し、暴力的な排除を正当化する主張を展開しています。自国中心、自民族優先で何が悪い、自分たちが苦しいのは「敵」のせいである、といった極端な議論が、人々の支持を集めるようになりました。

こうした世相を反映して、近頃は「どうしたら戦争を防ぐことができるでしょうか」という問いを投げかけられるようになりました。この質問を受けるたびに、思い出す本があります。英国の作家ヴァージニア・ウルフが 1938 年に出版した『三ギニー』（訳文は片山亜紀訳、平凡社、2017 年による）です。この本は「どうすればわれわれは戦争を阻止できるとお考えですか？」（7 頁）という男性からの手紙に、女性がしたための返信という形式で展開されています。

本が執筆された当時、欧州全体を巻き込む世界大戦への懸念が高まっていました。ところが男性からの問いかけに女性は共鳴しつつも、返信の冒頭には次のような驚きが表明されています。

貴兄のお手紙は人類の通信史上、おそらく例のないものです。いったい＜教育のある男性＞が一介の女性に向かい＜どうしたら戦争を阻止できるか、お考えを聞かせてくださいますか？＞などと尋ねたことが、これまで一度だってあったのでしょうか—（8 頁）

そして多くの資料を引用しながら、女性たちがいかに教育から、政治的・経済的・社会的活動から排除されてきたかについて論証していきます。そして返信の最後には、「あらゆる人びと、すべての男女が正義と平等と自由という大原則のもとで尊重される権利」（262 頁）を主張するこ

と、という質問への答えが導き出されるのです。

なぜ返信者は、戦争の時代に人権尊重の重要性を訴えたのでしょうか。手紙のなかで、女性たちが家父長制のもとで社会的な排除や差別を経験するという構造的な「暴力」と、独裁者による支配という政治的な「暴力」の連続性が指摘されています。私的空間と公的空間の双方における暴力の問題を明らかにし、克服するために「新しい言葉を見つけ、新しい方法を創造すること」(262頁)を呼びかけたのです。

戦争と平和に関する研究が明らかにしてきたことは、戦争は急には始まらず、戦争に至る複数の要因が積み重なった結果として発生する傾向があるということです。その要因の一つが差別や排除であり、「構造的な暴力」と呼ばれています。「敵を排除せよ」という主張に人々が共鳴する背景には、「自分たちこそが排除され、取り残されている」と感じる人々が増えているからではないでしょうか。

そうはいっても社会の構造を変えることなど、とてもできそうにないと諦める前に、思い出したい歴史があります。ウルフが生きた時代と異なり、私自身が大学院を出て、大学教員として働くことができるのは、まさに多くの女性たちが、女性も高等教育を受けることができる社会へと変えるために尽力してきた成果です。女性たちは実際に、社会を変えてきました。現実とは異なる社会の必要性を訴え、実現してきたのです。その営みは平和を作り出す力にもなるということを、戦争の時代にもう一度思い出したいと思います。